

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 5 月 29 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	川北 安奈

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
鹿児島県熊毛郡 屋久島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
屋久島実習/フィールド科学実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 5 月 21 日 ~ 平成 28 年 5 月 27 日 (7 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学 屋久島観察ステーション
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
【日程】 5 月 21 日 屋久島へ移動する 5 月 22 日から 25 日 フィールドワーク 5 月 26 日 データ分析とプレゼンテーション 5 月 27 日 屋久島から戻る
<p>本実習は、マレーシア・インド・ブラジルからの招聘者たちとともに、英語を公用語として行われた。私は、マレーシア人女性たちと同じ部屋で過ごした。彼女たちは畳の上で「川の字」になって寝るといふ日本の文化を経験し、同時に私はイスラームやマレーシアの文化に触れさせてもらった。</p> <p>招聘者たちはそれぞれバックグラウンドや食べられるものが異なり、来日して日本に慣れる間もなく屋久島実習が始まった。しかし、たとえ多忙なラボワークで疲れていたり体調が悪かったりしても、心配をかけまいと常に笑顔でよく話していた。フィールドワークもラボワークもどちらもこなす彼女たちから学ぶものは非常に大きかった。</p> <p>また、彼女たちと話す中で、日本の「察する」文化のユニークさに気づくことがあった。サル班・シカ班・イチジク班の 3 班で夕食後の食器洗い当番を日ごとに回していたのだが、ちょうどサル班が担当の日に、サル班は実験で忙しく、先生は「今日はサル班が食器を洗う順番だが、実験をしなければならない。実験から帰ってきて、もし食器が洗われていたら驚くだろう。」というような言い方をされた。それは遠回しに「食器洗い当番を他の班に代わってほしい」という意味で多くの日本人は理解していたと思うが、後で招聘者の一人にその意味を尋ねられた。日本では直接的にものを言わないことが多いと説明をすると、返ってきたコメントは、「このように大勢が共に生活するときには協力しなければならない。自分の仕事は自分で行い、できない場合にはお願いするものでは？」という内容だった。(私の英語力が乏しく間違った理解をしている可能性もあるが…) 共同生活では協力をしなければならないという部分に関してはよくわかるのだが、一言で「協力」といって</p>

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

も、日本の場合は相手の立場や気持ちをくみ取って行動するところまで含むことが多いのではないかと思います。海外の人がよく話すのも今回の実習で感じたことの一つだが、褒めるにせよ依頼するにせよ、彼ら彼女らは伝えたい内容に対して言語化する割合が高い。一方日本人は、言葉にしなくても伝わるのではないかと感じてコミュニケーションしているような気がする。この文化の違いはまだまだ上手く表現できないが、今回の実習で得たことを次のゲノム実習に活かして彼ら彼女らとコミュニケーションしていきたい。



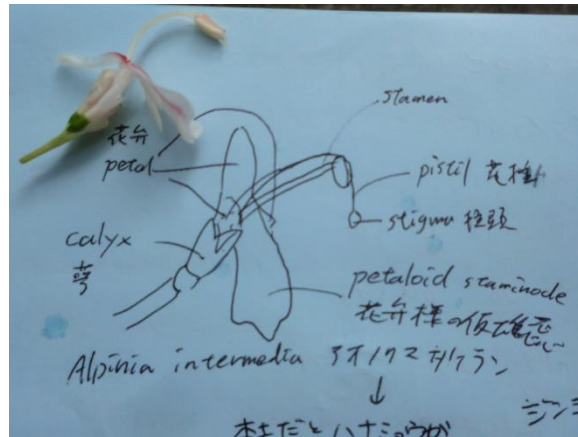
オオイタビの採取



サツマゴキブリ



オオイタビのステージごとの違い (左から 1~4)



植物学教室の友人に教わったアオノクマタケラン



半着生植物 アコウ



ヤクニホンザルとヤクシカ



マレーシア人男性に教わったシマヘビ黒化型



ヘビトンボ



6900年前の火砕流による土（他の所は花崗岩）



シカの骨

イチジクとイチジクコバチの班では、それらの共生関係について調査した。今回の調査では5種のイチジクを採取した。

Ficus sarmentosa, *Ficus erecta*, *Ficus pumila*は雌雄異株であり、雌株には花柱の長い雌花が、雄株には雄花と花柱の短い雌花がそれぞれ集まって果囊をつける。果囊の外見からは雌雄の判断ができないため、送粉コバチはいずれの果囊にも入り、受粉とともに雌花に産卵をする。花柱の長い雌花に産卵した場合は、産卵の影響を受けることなくそのまま種子ができるが、花柱の短い雌花に産卵した場合は、コバチの虫こぶができ、種子はできない。つまり、コバチが雌の果囊に入れば種子ができ、雄の果囊に入れば虫こぶができる。雌花の後に雄花が咲くため、幼虫・サナギの段階を経て成虫になったコバチは、交尾をした後、果囊から出る際に花粉を付けて次の果囊へ入っていく。

一方、*Ficus superba*と*Ficus microcarpa*は雌雄同株であり、花柱の長い雌花と、花柱の短い雌花、そして雄花が一つの果囊の中に存在する。種子になる部分と虫こぶになる部分が混在するということだ。コバチに関しては、先に雄が口で子房に穴をあけて出ていき、その後に雌の入っている子房にも穴をあけて雌を出すものもいるという。雄は競争で勝ち残ったものだけが交尾でき、花粉を付けた雌が果囊から出ていく。

初日は*Ficus pumila*と*Ficus microcarpa*を、二日目は*Ficus sarmentosa*と*Ficus superba*を、三日目は*Ficus erecta*と*Ficus superba*を採取した。採取した果囊について、直径、色、硬さを調べた。色は果囊全体のうち何割が緑色を占めているかを記録し、硬さは最初

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

に班員で基準を設けた後に手で触って、hard, intermediate, soft の3つに分類した。果嚢を縦半分に切断し、内部の様子から、雌花のみの状態（ステージ1）、雌花のみが発達しておりコバチの幼虫やサナギが見られる状態（ステージ2）、雄花が咲いており成虫コバチが見られる状態（ステージ3）、成虫コバチが出て行った後の状態（ステージ4）の4段階に分類した。コバチはエタノールに浸漬して保存した。

5種のイチジクに関して、合計485の果嚢を採取した。そのうち169の果嚢から、送粉コバチや寄生コバチ、線虫、イヌビワシギゾウムシ、双翅目幼虫などが採取された。*Ficus pumila*, *Ficus superba*, *Ficus erecta* においては、果嚢の直径と硬さの間に負の相関が見られ、また、果嚢の発達段階（ステージ）と直径の間に正の相関が見られた。

ゲノム実習では、本実習で採取したコバチの種同定などを行う予定である。

6. その他（特記事項など）

本実習はPWSリーディング大学院プログラムの支援を受けて行われました。湯本先生、岡本先生をはじめとして本実習に携わってくださった皆さまに厚くお礼申し上げます。また、藤枝さまには招聘者たちの都合に配慮した美味しいお食事を毎日作っていただきました。どうもありがとうございました。